W.E.B.デュボイスの“The Prayers of God”における「認識」の瞬間と「二重意識」の概念

富　澤　理英子

1　イントロダクション

W.E.B. デュボイス（William Edward Burghardt Du Bois〔1868-1963〕）[1] はアフリカン・アメリカンの哲学者，社会学者，歴史学者，公民権運動の活動家等，多様な顔を持つ人物であったが，小説家，詩人，芸術批評家としても多くの作品を残した.[2] *The Souls of Black Folk*（1903）を初めとして，1968 年までに自伝や自伝的著作が四冊出版されたが，“The Prayers of God” は 1920 年出版の自伝的著作 *Darkwater* の中で発表された詩である.

Darkwater はデュボイスの人種問題に関するエッセイ（政治的，経済的，社会的分析），自伝的叙述，文学作品（詩やフィクション）を一冊に収めた特徴的な構成[3] の作品であり，第一次世界大戦後のアメリカ社会の大変動，工業化の進展に伴う黒人達の南部から都市部（北部）への移動，Ku Klux Klan の再興，黒人達の住居地の拡大と雇用等に対する白人達の反発，黒人達へのリンチ[4] や 1919 年のシカゴの “Red Summer”[5] に代表される暴動の多発等，二人種間の緊張が異例の高まりを見せた時代に出版された.

デュボイス自身は当時 NAACP（全米黒人地位向上協会）のリーダー，その機関紙 *Crisis*[6] の editor，パン・アフリカニズムの運動家，そして人種問題のコメンテーターとして大きな影響力を持っていたのだが，*Darkwater* はそのデュボイスの，プロパガンディスト[7] としての代表的作品と評されてきた.

全 10 章からなる *Darkwater* の中の 1 章 “The Souls of White Folk” では，

デュボイスが "HIGH IN the tower, where I sit above the loud complaining of the human sea" と自ら述べる地点から，白人達の姿や魂を観察するというスタンスが表明されている[8]が，"The Prayers of God" では一人の白人男性（「私（"I"）」）の心理が独白（神への語りかけ）という形式の中で描かれている．「私」は戦争を批判し，戦場の惨状への嘆きを神に訴え，救いを求めた後，自分がアフリカン・アメリカンに対するリンチに加わった事を神に告白するが，その相手が実は神であったという「認識」の瞬間が訪れ[9]，驚愕し，最後は，*"Courage, God, / I come!"* という言葉を発する場面で終わっている．

問題はこの「私」の意識の変容の過程であろう．「認識」の瞬間の重要性は，イタリック体の使用等で明確に強調されているが，何故「神」だと気づいたのか，また，神が今必要としているのは「私」の手であると認識する際も，何がきっかけでこのように認識したのか．認識に至るまでの心のメカニズム，神と私の間のダイナミクスは詳細に描かれず，多様な解釈の余地を残している．

1919 年の NAACP の *Thirty Years of Lynching in the United States, 1889-1918*[10] の出版等，黒人達のプロテスト[11]が盛んになっていた当時の背景を考慮すると，この作品の「私」の「認識」へのプロセスには暴力の加害者の意識が転換し，自分の行為の暴虐に胸を痛める時点がいかにして引き起こせるかについての当時のデュボイスの真剣な模索と戦略が反映されている可能性が高い．

デュボイスの著作の大きな特徴の一つとして「二重意識」（"double consciousness"）という概念[12]に代表される人間の心理メカニズムの観察，概念化があげられるが，「認識」の瞬間に至るまでの「私」の心の詳細な道のりやメカニズムが言語化されないことの意義や理由は重層的であると思われる．デュボイスが人種的摩擦の解決の鍵を登場人物の心の動きに込めているのであれば，この「認識」のメカニズムと，デュボイスの「二重意識」理

論の中に交差する数々の言説（アイデンティティ，視座の構成，self と other の関係性の構成，異人種間のコミュニケーションのモデル，他者理解と自己認識のモデル）を併せて考察する必要があるだろう．"Criteria of Negro Art"（1926）の中で，デュボイスは "all Art is propaganda"（328）と述べているが，文学の形態をとった "The Prayers of God" には，*Crisis* 等におけるエッセイとは違う形のメッセージやアピールが見られるのではないか．この詩はこれまで主に *Darkwater* の一部として論じられてきたが，[13] 本稿では「私」の「認識」を中心にこの作品の考察を試みたい．

2. メッセージの授受と「私」の「認識」

デュボイスの著作では多様な形の「認識」が重要なモチーフとして語られ，劇的に描かれている [14] が，"The Prayers of God" でも劇的に描かれている．以下第 11 連が，「私」が神にリンチを加えていたと気づく場面である．

For this, too, once, and in Thy Name,
I lynched a Nigger[15]—
(He raved and writhed,
I heard him cry,
I felt the life-light leap and lie,
I saw him crackle there, on high,
I watched him wither!)
Thou?
Thee?
I lynched Thee?（147）

"*Thou?*"（あなた（神）ですか？）という 8 行目の「認識」の直前の行間に何があったと考えるべきか．3 行目から 7 行目まで，リンチで痛めつけられた黒人の記憶が再生されており，括弧の使用は，「認識」の重要な契機であ

ることを示唆していると思われるが，そこからいかに「神（あなた）」に結びついたか．この作品には神の言葉は直接描かれず，「私」の言葉を通してのみ表現されるので，「私」と「神」二者の会話の有無，コミュニケーションの実態，認識に至る心理的メカニズムは行間の解釈次第といえよう．

まず，「私」が直接神のメッセージを聞いたという可能性があろう．キース・バイアマン（Keith E. Byerman）は，"He goes on to concede his complicity in a lynching. Then the divine message is revealed: '*Thou?/Thee?/I lynched Thee?*'" (191) と読み取っている．これは神がメッセージを送った（神が実在した）という解釈であるが，確かに前半，神の沈黙に焦れ，"Hear!/ Speak!/ In Christ's Great Name—" (146) と叫んでいた「私」が，

> I hear !
> Forgive me, God !
> Above the thunder I hearkened;
> Beneath the silence, now,—
> I hear ! (146)

と叫ぶようになった事から考えると，神が登場し，神のメッセージの受信に成功したと考えられる．また，この詩のタイトルが "The Prayers of God" である点からも，神の側からのアクション，メッセージの発信（アピール）が行間に隠されていると考えられるだろう．

では，このメッセージの授受の構図において「認識」とは何か．再度 "*Thou?/ Thee?/ I lynched Thee?*" の3行を見ると，記憶の中の黒人が「神」であるという「他者」に関する認識，そして神を暴力で痛めつけた人間が自分であるという自己認識の両方である．これは，デュボイスの作品に形を変えて登場するモチーフの一つであり，彼の有名な「二重意識」概念の中に交差する多様な論理，言説の一部と考えられよう．「二重意識」の代表的な定

義の一つは

> One ever feels his twoness,—an American, a Negro; two souls, two thoughts, two unreconciled strivings; two warring ideals in one dark body, whose dogged strength alone keeps it from being torn asunder. (5)

であるが，これは一人の黒人の心理の中に内在化された二つの自己，視点，アイデンティティであり，同時に現実の世界の白人と黒人の関係やその他多種の二元論のメタファーでもある．神が黒人で，「私」が白人男性だというプロットがある限り，この詩は二重意識の二元論にあてはまる可能性がある．

この詩の二者間のメッセージの授受，他者理解と自己認識の同時性の構図は，デュボイスの *The Souls of Black Folk* (1903) の第1章 "Of Our Spiritual Strivings" のエピグラフに使われた英国詩人 Arthur Symons の詩 "The Crying of Water" (1900) とかなり共通している．これは直接黒人をテーマとせず，デュボイス本人の作品ではないが，デュボイスが二重意識概念を紹介した *Souls* の第1章に掲載された事から，二重意識概念の具現化の一種である可能性が高いと考えられる．

> O water, voice of my heart, crying in the sand,
> All night long crying with a mournful cry,
> As I lie and listen, and cannot understand
> The voice of my heart in my side or the voice of the sea,
> O water, crying for rest, is it I, is it I ?
> All night long the water is crying to me. (3)

"The Prayers of God" で神が「私」にメッセージを投げかけてくるのと同様，この詩でも "the water is crying to me" と「水」から「私」へのメッセージ

が投げかけられる．「私」は「水」という他者の "crying with a mournful cry" という姿（声）を "listen" という行為を通して知り，同時にこの「水」を "voice of my heart" であると自己認識をする．"The Prayers of God" の「私」は "I sense that low and awful cry—/ Who cries? / Who weeps? / With silent sob that rends and tears—/ Can God Sob?"（147-148）と泣いている神の姿に気づき，"Prayest Thou, Lord, and to me?/ *Thou* needest me?"（148）と自己を認識する．

「二重意識」概念の紹介において，デュボイスは，

> The history of the American Negro is the history of this strife—this longing to attain self-conscious manhood, to merge his double self into a better and truer self. In this merging he wishes neither of the older selves to be lost. He would not Africanize America, for America has too much to teach the world and Africa. He would not bleach his Negro soul in a flood of white Americanism, for he knows that Negro blood has a message for the world. . . .（5）

と述べ，二つの自己（"older selves"）のそれぞれ（"America"と"Negro soul"）の役割と一種の相互作用の図式を説く．"The Prayers of God" における「神」と「私」のやりとりはこの図式と考えられよう．「二重意識」では黒人をメッセージの発信者と定義づけ，そのメッセージの重要性を説いていると思われるが，この "The Prayers of God" においても黒人である「神」は（世界へ）メッセージを投げかける役割をしている．

"The Crying of Water" では（水という「他者」の姿をした）自分自身から自分に向けられるメッセージを「私」が聞くという図式が隠れている．ここでは「二重意識」概念の自己の分割理論，一人の中の二つの自己の対話が描かれている事になる．この図式を "The Prayers of God" に適用すると，「私」と「神」は一人の人間の中の二つのアイデンティティである．「私」は

「神」の姿をした自分自身から自分へのメッセージを受信し，「認識」という作業を完了している事になる．

また，「認識」につながると思われる，神からのメッセージの中身と送り方も考えるべきであろう．一つの形は前述の "Help! / I sense that low and awful cry—/ Who cries? "（147-148）の部分（詩の終盤，神にリンチを加えていたと気づいた後の場面）で実際に神が泣いているのだとすれば，言葉を使わず，"cry," "sob" 等の自分の姿を見せるという形態で神が世界へのアピールをしていることになる．そして，「二重意識」概念の "a message for the world" の中身は "The Prayers of God" の場合，一見他者（神）の "cry" という形態だが同時に「私」自身の痛みだと認識する図式を持つ．

この図式で考えると，前述の「認識」の場面における "*Thou?* "（あの（自分がリンチした）黒人はあなた（神）だったのですか？）の前の括弧内の５行（He raved and writhed,/ I heard him cry,/ I felt the life-light leap and lie,/ I saw him crackle there, on high,/ I watched him wither! ）はリンチの被害者の苦しむ場面の再生という形態を装いながら，神が自分自身の痛む姿を「私」に想起させるというパターンのメッセージ（特に記憶上の黒人から現在の「私」への "cry" という音声のメッセージ），「認識」への引き金，戦略であったと考えられる．もしこの作品がデュボイスと同時代の読者とのコミュニケーションで，多発する暴力への実践的な解決を狙うものならば，このリンチという暴力の現場の被害者の痛みの現状を，音と視覚で構成したイメージで読者に告発し，アピールし，他者への理解と自己認識の同時性を促そうとした事になる．そして，再度「二重意識」概念の自他の同一性，自他共存のアイデンティティ構成を適用すると，神の痛みは他ならない「私」自身の痛み，あるいは「私」自身が今後経験しうる痛みであるという論理，そして，黒人達への攻撃は（白人達の）自分自身への攻撃である，というメッセージまでも含みこむ事になる．

「私」と「神」との交信が始まった後は「私」が「神」の尋問[16]に答える

というパターンが続く．これも小さな「認識」の積み重ねであり，ハイライトで「私」が神にリンチを加えていたという大きな「認識」の前段階として組まれたプロットであろう．

This gold?
I took it.
Is it Thine?
Forgive; I did not know.（146）

1行目は神の言葉の復唱であるので，ここでも「私」の「聞く」という行為が，「神」（「黒人」）が gold の所有者であったという他者への認識と，不当に gold を奪っていた自分の認識につながるという図式を描いている．次も尋問である．

Blood? Is it wet with blood?
'Tis from my brother's hands.
(I know; his hands are mine.)
It flowed for Thee, O Lord.（146）

神の質問は，"my brother" が黒人だとすると，自分が本来同胞である黒人を攻撃していたという認識を「私」に促している．3行目の括弧は深層心理か「認識」の重要な契機を示唆するのだろう．「私」の深層心理では，流血している黒人の手は自分自身のものであるという認識があることを示していると考えられる．これは二重意識概念の自他の共存，あるいは，他者のアイデンティティを自分の一部とする理論ともつながるだろう．また，4行目の弁解は自分の所業の罪深さが深刻であるという認識が徐々に深まってきている表れだと考えられる．これらが神とのメッセージの授受と「認識」のメカニズムのパターンである．

3. 能動的に聞き，察する姿勢と「認識」

メッセージ受信の成立だけでなく，神の言葉を求める「私」の能動的な姿勢も「認識」をもたらした要因と考えられよう．神の声を聞き取るには，卓越した相手の言葉を聞く力と能動性が必要な筋書きになっている．詩の冒頭の，

Name of God's Name !
Red murder reigns;
All hell is loose;
On gold autumnal air
Walk grinning devils, barbed and hoofed;
While high on hills of hate,
Black-blossomed, crimson-sky'd,
Thou sittest, dumb. (145)

という部分では戦場の悲惨を訴え，神の沈黙に焦れるが，このパターンが "And Thou art dumb," "While Thou art dumb" と三つの連で繰り返される．前述の "Hear!" "Speak!" は積極的に神に発話を促し，神とのコミュニケーションを強く求める姿勢で，前述の "I hear!/ Forgive me, God!/ Above the thunder I hearkened;/ Beneath the silence, now,—/ I hear!" (146) は "I hear!"が二度繰り返される等，相手（神）の言葉を聞く姿勢を強く表明し，聞き取り難いものさえも聞くという高度な「聞く姿勢」が示されているとも解釈できよう．この詩の前半のプロットでは "Have mercy!" と叫んでいる等，自分が苦しくて神に対話を求めていると考えられるが，ポイントは，神が自分の加害した黒人だと気づいた後のプロットにおいても，"Prayest Thou, Lord, and to me? " (148) と相手を「神」として扱い，同時に相手の声を聞こうと食い込む姿勢を見せている点であろう．

そしてこの能動的なスタンスによって前述の "I sense that low and awful cry—/ Who cries? " (147-148) と言葉のない神の心を感じ取るに至る．この際に相手の声を乞うというスタンスは "Who prays?/ I hear strong prayers throng by" (148) の部分等，考えをあれこれめぐらし「相手」「他者」を察したり，理解しようとする能動性にもつながっていると言えよう．

また，詩の前半の神の沈黙は「神」側のアピールの一つであり，相手（「私」）の関心，能動性を喚起し，「認識」を引き起こす為の一種の戦略ともとれる．沈黙や物理的な聞き取り難さは，語り手を能動的に身を乗り出して「聞き取り」に参加させる効果を発揮しているとも考えられよう．聞き取り難さは「聞き手」にフラストレーションを与えると同時に自力で考え，解釈し，解決策を編み出させる効果にもつながる．ならば，この詩の形式は独白で「私」側の嘆き（ジェレマイアド jeremiad）[17] の詩であるが，相手の心への作用という点ではやはり「神」側からのアピールの詩であり，*"Thou? "* という「気づき」直前の行間では「神」と「私」両者の能動性の相互の呼応の図式が存在すると考えられる．ではこの呼応の図式を「二重意識」概念と併せて考察すると，どう解釈できるだろうか．

「二重意識」概念の二つの自己は前述の通り，"an American" と "a Negro" であり，その "two souls" や "two thoughts" は "two unreconciled strivings; two warring ideals in one dark body" (5) という対立の図式を有しているが，[18] 同時に一種の能動性の呼応の形式としても解釈できる．これは "The Prayers of God" において "We murdered./ To build Thy Kingdom" (147) と述べる「私」の理想と，実際の「神」が「私」に望む理想や「祈り」との相克の構図と一致している．

しかし，「二重意識」の二つの自己の相互作用に関してもっと重要なのは前述の "America has too much to teach the world and Africa" (5) と "Negro blood has a message for the world" (5) の部分であろう．後者の "the world" が "America" を含むとすると，"America" と "Negro blood" 二

者の一種の相互作用の図式になる．"The Prayers of God" の「私」が「二重意識」概念の "America" で「神」が "Negro blood" だとすると，「二重意識」の "Negro blood" と "The Prayers of God" の「神（黒人）」がメッセージの発信者として共通の役割を持つのに対して，「二重意識」の "America" と "The Prayers of God" の「私」は異なる役割（機能）を見せていると言える．"America" は "teach" する存在であり，「私」は相手の言葉を聞き取ろうと努める面を見せる．"teach" という動詞の表す意味は多様に解釈できるが，"too much" という部分が抑圧的な white America に対するデュボイスの皮肉だとすると，この詩の「私」の「聞く」という姿勢は「二重意識」の描く "America" のベクトルに対する一種の対抗言説であり，「私」の大きな「認識」の瞬間をもたらしたものになる．

また，相手にコミュニケーションを求め，理解しようとする「私」の姿は「二重意識」概念の "to merge his double self into a better and truer self" という "strife" のベクトルと一致する．「二重意識」で二つの自己の "merge" を求めたのは黒人であるのに対し，"The Prayers of God" では白人である「私」が相手に歩み寄り，"Is this Thy Crucifixion, God," と相手の痛みをメディテートし，"This pain—is it Thine?" (147) と，自己と他者の境界の揺らぎを見せるまで，近づく．最後の "*Courage, God, / I come!*" が「二重意識」概念の "to merge" の象徴であるなら，この詩は白人である「私」が「二重意識」概念の黒人側の希求を体現していることになる．

デュボイスは 1903 年出版の *The Souls of Black Folk* の "Forethought" で，

> HEREIN LIE buried many things which if read with patience may show the strange meaning of being black here in the dawning of the Twentieth Century. This meaning is not without interest to you, Gentle Reader; for the problem of the Twentieth Century is the problem of the color-line. I pray you, then, receive my little book in

all charity, studying my words with me, forgiving mistake and foible for sake of the faith and passion that is in me, and seeking the grain of truth hidden there. (1)

と述べているが，デュボイスのメッセージはメッセージの受信者も無関係でいられない問題であり，受信者はデュボイスが本文に込めた多くの事，また明らかに語られない事実，そして「ここに隠された真実の穀粒」を自分から能動的に行間から探してほしいという論理である．"I pray you" というこの部分同様，「祈り」という形で，"The Prayers of God" の神（黒人側）はメッセージを発信し，「私」はこのベクトルに押される形で語り，聞き，想像し，また読み取ろうとしている事になり，この点においてはデュボイスの望むコミュニケーションの一つの形がこの作品の中で実現していることになる．

そして実現した「認識」の瞬間（*Thou?/ Thee?/ I lynched Thee?*）の直後は，

Awake me, God! I sleep!
What was that awful word Thou saidst ?
That black and riven thing—was it Thee ?
That gasp—was it Thine ?
This pain—is it Thine ?
Are, then, these bullets piercing Thee ? (147)

という場面になるが，ここでは「私」の受けた衝撃の大きさが強調されている．3行目でリンチをされた黒人の体の事を「"thing"（物体）」と認識する等，「私」は "racist" として描かれているが，これは1行目の "Awake"[19] の必然を強調し，"Awake me, God! " では「私」の自己認識を目標とする「神」の戦略が成功している事を表している．さらに，自分を "I sleep! " と認識し

ている「私」がさらなる自己認識と他者理解を求めている姿勢もまた "Awake America!" (1917) 等でアメリカの覚醒を説いてきた[20]デュボイスが，この「私」に望んだ心の姿勢の表現である．バイアマンがこの詩のデュボイスの想像と現実とのギャップを "white virtue must be recorded in the language of the imagination" (101) と指摘した通りのずれがここで表現されている事になる．

5行目 "This pain—is it Thine?" を「二重意識」概念の中の，一人の人間の中に内在する他者のアイデンティティという図式で考えると，「私」の能動性は，自他のアイデンティティの境界を揺るがし，「他者」である「神」の視点の内包を可能にした事になる．これは同時にデュボイスが *Darkwater* の冒頭 "Credo" で表明したメッセージ，

> I believe that all men, black and brown and white, are brothers, varying through time and opportunity, in form and gift and feature, but differing in no essential particular, and alike in soul and the possibility of infinite development. (1)

の中にある，全ての人間は同胞であり，「魂」という点では似た存在であるという概念ともつながる認識である．

デュボイスは黒人として，アメリカ人としてのアイデンティティ，二つの "warring ideals" に引き裂かれかねない存在としての黒人を定義すると同時に，"In this merging he wishes neither of the older selves to be lost" "He simply wishes to make it possible for a man to be both a Negro and an American" (*Souls* 5) のように，多種の二項対立を分割した形，あるいは両極の形のまま内包しうる主体としても定義し，持ち続ける事の重要性を示した．これは黒人サイドにとっての敵側の視点さえも内包し，把握する可能性を含む主体モデルである．この "The Prayers of God" は白人側の視点が「私」の言葉で表明されているが，「他者」である「神」の視点，経験を想像

上でメディテートしている点で「二重意識」概念の「二重性」「他者内包」の構造を白人側が体現しているケースと言える．

このように，「私」が神を攻撃していたという「認識」の直前の空間には，「私」と「神」二者の呼応の図式と，「私」が主体の二重性を有する状態が生まれ，この状態自体もデュボイスが読者にアピールしたものだったと考えられる．

4. 神の視線と「認識」

これまでは神と「私」の対話が成立したという前提に「認識」を考察してきたが，神との対話がない状況の中で，「私」が（自分が加害した黒人が神だと）気づいた可能性も考えられる．「私」は"I hear!"と，神との交信の成功を叫んでいるが，続く"(Wait, God, a little space./ It is so strange to talk with Thee— / Alone!)"（146）という部分等，神の存在は曖昧性を残している．また，神が直接発言せず，「私」の独白という形式で作品が終始している限り，「私」は自分の想像する神のイメージと対話をしており，この対話が「認識」につながったとも想定できよう．デュボイスの「二重意識」理論の代表的な定義は，

> It is a peculiar sensation, this double consciousness,this sense of always looking at one's self through the eyes of others, of measuring one's soul by the tape of a world that looks on in amused contempt and pity. (5)

というものであり，また，

> . . . the Negro is a sort of seventh son, born with a veil, and gifted with second-sight in this American world,—a world which yields him no true self-consciousness. . . . (5)

とアメリカの黒人に与えられた視点の特徴について解説している．デュボイスは，*Darkwater* の第 2 章 "The Souls of White Folk" で "none there are that intrigue me more than the Souls of White Folk" (17) と述べ，自らの白人達に対する視座について，

> Of them I am singularly clairvoyant. I see in and through them. I view them from unusual points of vantage.
> . . . Rather I see these souls undressed and from the back and side. I see the working of their entrails. I know their thoughts and they know that I know. (17)

と述べている．キース・バイアマンは上記の "I see these souls undressed and from the back and side" の図式（白人の経験する視点）を一種の「二重意識」と見なしている (186)．もし，このデュボイスが表明した視座を "The Prayers of God" の神の視点に適用すれば，この詩もまた二重意識概念の "second-sight," "the eyes of others" 理論の一種の具現化（人種的構成がオリジナルの概念と丁度反転した図式）になるのではないか．この詩では白人男性である「私」がいかに "unusual points of vantage" にいる「神」から見られているかを読み取る道筋や，神という "the eyes of others" を通しての自己認識が，神にリンチを加えていたという「認識」につながる図式が考えうるだろう．この派生として前述の罪の自白，謝罪，弁解があると読める．

また，オリジナルの「二重意識」概念では，一人の黒人の内部に存在する二つの自己，二つの視線が共存していたが，デュボイスが白人の魂を見通す時に "Not as a foreigner do I come, for I am native, not foreign, bone of their thought and flesh of their language" (*Darkwater* 17) であった事を "The Prayers of God" のケースにあてはめるなら，この詩はやはり「私」一人の中に存在する二者の会談として読めるであろう．神（黒人）は「私」

（白人男性）にとって「他者」であり，同時に自分の内部に存在するもう一つの自己，自分を見る視線である．この異質な二種の自己の共存は，前述の「二重意識」概念の中の自己の二重性に関する定義 "One ever feels his twoness,— an American, a Negro; two souls, two thoughts, . . ." (5) の図式とも一致する．

"The eyes of others" の性質のうち，「傍観する他者の視線」に関しては "Name of God's Name!/ Red murder reigns;/ All hell is loose; On gold autumnal air" (145) , "Father Almighty!/ This earth is mad!" (145) と戦争の悲惨を神に語りかけて，"Stand forth, unveil Thy Face," "Hear!/ Speak!/ In Christ's Great Name—" (146) と返答を求めたり，"Have mercy!/ Have mercy upon us, miserable sinners!" (146) と救済を求めている「私」（白人の男性側）に対して，沈黙で答え，助けの手をさしのべない神のスタンスは，「私」から見ると，助けの手をさしのべない「傍観者」といえる．また，この視点が「私」の "Stink with the entrails/ Of our souls./ And Thou art dumb." (145) や "Have mercy upon us, miserable sinners! " (146) にある自己批判的な自己イメージを生んだと考えられよう．

そして，前述の "This gold?/ I took it./ Is it Thine?/ Forgive; I did not know" と "Blood? Is it wet with blood?/ ' Tis from my brother's hands./ (I know; his hands are mine.) / It flowed for Thee, O Lord." (146) という部分は，自分の想像する「神」という "the eyes of others" から自分がどう見られているか，神が今の自分にどういう質問をするかという想定に基づいた反応であろう．この神の「視線」で考えると，メッセージの授受の図式と少し異なり，前述の金の所有者の問題，そして流血と汚れた手に関する問題，そして，

War? Not so; not war—

Dominion, Lord, and over black, not white;
Black, brown, and fawn,
And not Thy Chosen Brood, O God,
We murdered.
To build Thy Kingdom, ... (147)

の部分における「戦争」の責任等が，実際は，「私」自身の深層心理の中で元々罪悪感を持って認識されていた可能性も出てくる．（他の部分の「私」のキャラクタリゼーションの自己批判的な一面とも一致する）．ならば，自分が神を攻撃していたという「認識」（*"Thou?"*）の直前の行間には自分が内包する「神」の視点という形をした，「私」自身の（現実の行動とは全く別に）一部分である思考—モラル，正義感，暴力への罪悪感，黒人の尊厳を認める心—が，黒人の苦しむ様子の回想の後，自動的に作動していたという図式も見えてこよう．そして，この「認識」の起こりえた行間のメカニズムは，この詩の結末 *"Courage, God, I come!"* (148) と共にデュボイスが望んだ理想の様態であったのだろうか．

デュボイスは "Criteria of Negro Art" (1926) というエッセイの中で，Art を

> Thus all Art is propaganda and ever must be, despite the wailing of the pursuits. I stand in utter shamelessness and say that whatever art I have for writing has been used always for propaganda for gaining the right of black folk to love and enjoy. (328)

と定義している．その "the tools of the artist" は "truth" であり，そして，

> Again artists have used Goodness—goodness in all its aspects of justice, honor and right—not for sake of an ethical sanction but as the one true method of gaining sympathy and human interest. (327)

だといっている．"The Prayers of God" がデュボイスの定義する "Art" の一つであり，一種の propaganda であるなら，白人である「私」を作品の前半で沈黙を持って「傍観する」神は "truth," "goodness," "justice," "honor," "right" の基準そのものであり，「私」に，自らをこの基準によってはからせる役割として機能している事になろう．自分達の手を "Palsied, our cunning hands" (*Darkwater* 145) と呼んだりするのも，神から自分たちへの視点にもとづいた呼び方になっており，「認識」の瞬間もやはりこの視点の延長に訪れたと考えられるだろう．

もし，この詩の発表された当時の背景も考えるなら，"The Prayers of God" は「二重意識」の概念を変形（オリジナルの人種的構成を反転）させて，"the tools of the artist" に基づいた神の（必ずしもキリストに限らず）道徳的な視線を発信し，暴力を実践する者達に「神からどう見られるかを考えるように」促し，行動を正すメッセージが隠されていると考えられる．

詩の終盤，以下の連の 2 行目から 4 行目にかけてイタリック体が使用される部分が "Thou," "needest," そして "me" の順にスライドしている．

Prayst Thou, Lord, and to me ?
Thou needest me ?
Thou *needest* me ?
Thou needest *me* ?
Poor, wounded soul !
Of this I never dreamed. I thought— (148)

4 行目の「自分が必要」であるという事実が最後になるのは，最も実感しにくい，あるいは一番大事なアピールとして強調されていると考えられる．この詩がプロパガンダであり，"me" が作品中の「私」だけでなく，読者である可能性を考えると，神から「私」だけでなく，デュボイスから読者への

メッセージともとれ，次の連が，*"Courage, God, / I come!"*（148）であるからには人種的摩擦に関して何らかのアクションを促し，読者の「認識」を促すものとも考えられる．マニング・マラブル（Manning Marable）が "Du Bois does not attempt to persuade or cajole his white audience"（vi）と述べる通り，直接的な要求をアピールとして表明するのではなく，上記の意識の移行表現に見られるように，デュボイスは登場人物の意識構造自体をプロパゲートしたと考えられよう．

5．結論

以上，"The Prayers of God" という詩のハイライトである「認識」の瞬間の直前の行間をデュボイスの「二重意識」と併せて考察してきた．「二重意識」概念の含意，定義自体が重層的であることから，「自己の二重性」「他者理解と自己認識の同時性」「メッセージの授受の構図」「他者の視線を通した自己認識」「二つの自己の相互作用」等，異なった面から詩を解釈してみたが，いずれの場合も浮き彫りになるのは，「二重意識」概念の持つ性質が二人種間，そして一人の人間の中の二つの自己の間の葛藤，「他者理解」という課題を解決する鍵を含んでいるという事である．

「二重意識」は黒人のアイデンティティを二方向に引き裂いたり，黒人の自意識を奪ったりと，ネガティブな含意もあるが，同時に視点が複数であることの利点も積極的に表明している概念だと言える．「私」に「認識」をもたらすメカニズムの中に多層的に織り込まれていた二重意識概念の定義の一つは，二項対立する自己を分割した形のまま内包する主体構成であるが，これは敵側の視点も内包し，把握する可能性をも含む主体であると考えられよう．暴力の加害者が自分と逆の立場である神（黒人）の視点を想像上でメディテートし，内包する「私」というモデルは，「二重意識」概念の一種の具現化であり，他者理解の実現に通じる．デュボイスは「二重意識」の概念が二つの人種間の相互理解に関して持っている可能性をこの詩の中で発揮

し，「認識」の瞬間の直前の（詳細が語られない）行間の中に，人間がこの意識構造と複数の視点を持つことの実践的な効果を込めたのではと考える．

また，暴力の加害者が暴虐に胸を痛めるようになる時点が何によって起こるのかに対する解答の一つが「聞く」という行為に代表される能動的な「他者理解」の姿勢を持つ事であり，この「私」の姿勢そのもののプロパガンダが「認識」をハイライトとしたこの作品に隠されているのではないだろうか．

注

＊本稿は，同志社大学英文学会 2005 年度年次大会（同志社大学，10 月 30 日）における口頭発表の原稿に加筆・修正したものである．

1　マニング・マラブル（Manning Marable）はデュボイスを「疑いなくアメリカ史でもっと影響力のある黒人のインテレクチュアル」と評した．(v)

2　キース・E・バイアマン（Keyth E.Byerman）は "Du Bois tended to see himself as a man of letters, one who demonstrated significant literary skills regardless of the subject matter," また，"He was, quite self-consciously, one of the father figures of the Harlem Renaissance"（100）と指摘する．

3　1903 年出版の *The Souls of Black Folks* と基本的な構成は同じであると評されることが多い．

4　1919 年に NAACP（National Association for the Advancement of Colored People）は "a federal law against lynching" の通過を獲得するための第一歩を踏み出したが，可決されなかった（Franklin and Moss 392-393）．

5　シカゴの "Red Summer" については Johh Hope Franklin and Alfred A. Moss, Jr., *From Slavery to Freedom: A History of African Americans*（New York: Knopf, 1947, 2000）を参照した．これはアフリカン・アメリカンの作家，James Weldon Johnson が命名した大規模な異人種間闘争であり，この年の 7 月 27 日に始まった．南部の黒人達は移住後シカゴに集中して住み，1920 年当時の調査ではおよそ 109,000 人が居住していた．この暴動で 38 人が死亡（内 15 人が白人で 23 人が黒人），537 人が怪我をし（178 人が白人で 342 人が黒人）残る 17 人の人種的アイデンテイテイは不明であり，1000 以上の家族が家を失った（385-389）．

6　Herbert Aptheker によると 1919 年の最大発行部数は 100,000 部を超え，推定 250,000 人の人達が毎月デュボイスの書いたものを読んだことになる（5）．

7　アーノルド・ランパーサッド（Arnold Rampersad）は *Messenger*（"the black Socialist magazine" として紹介している）の *Darkwater* の review の例を挙げ，"the journal (*Messenger*) damned Du Bois as a political thinker by praising him as a visionary poet" と述べた（160）.

8　John Hope Franklin と Alfred A. Moss, Jr.は *From Slavery to Freedom: A History of African Americans* の中でこの章の冒頭の抜粋を "Democracy Escapes" という章の一部として掲載している（391）. Joe R.Feagin はこの章を "the first major analysis in Western intellectual history to probe deeply White identity and the meaning of Whiteness" と評している（11）.

9　Wilson J. Moses はこの詩の "a white racist is unaware that the god he addresses is a personification of Black Folk" というプロットに関して "an exceptionally ironic poem, even for Du Bois"（422）と述べている.

10　John Hope Franklin と Alfred A. Moss, Jr.によると，当時 NAACP は黒人への暴力，犯罪の実態についての "a thorough investigation" を行い，一般の人達に知らせようとしていた（393）.

11　John Hope Franklin と Alfred A. Moss, Jr. は当時の黒人たちの状況を "In the years immediately following World War I no meeting of a national organization of African Americans neglected to register its protest against the failure of the United States to grant them first-class citizenship"（392）としている.

12　この概念は初め，*Atlantic Monthly*（August, 1897）の中で "The Strivings of the Negro People" という記事の中で登場したが，後にこの記事は *The Souls of Black Folks* の第一章として出版された.

13　近年では，2000 年に Phil Zuckerman, *Du Bois on Religion* というデュボイスの宗教に関する詩のアンソロジーの中で，"A Litany at Atlanta" や "Credo" 等と共にこの作品が独立した詩として収録されている.

14　有名なものは *The Souls of Black Folk* の中で語られた子供時代の記憶であろう．白人のコミュニテイの中で他の子供達との違いに気づいたという場面では "Then it dawned upon me with a certain suddenness that I was different from the others" のような表現がされている（4）.

15　デュボイスはこの "Nigger" という言葉をあえて使用し，大文字で表記している．これは *Darkwater* の中で白人達の心理を見通していると述べている事（17）を併せて考えると，「私」の黒人に対する見方を意図的に強調している可能性があろう.

16　バイアマンは「尋問」だと解釈している（101）.

17　アーノルド・ランパーサッド（Arnold Rampersad）は *The Art and Imagination of W.E.B.Du Bois* の中で "a jeremiad in which the world-sinner is

confronted by the 'Father Almighty'" (171) と評している.

18　シャムーン・ザミール（Shamoon Zamir）は「二重意識」という概念を "the divided self shaping itself inside the dialectics of disunity and reintegration" (154) と捉えている. ヘンリー・ルイス・ゲイツ Jr. (Henry Louis Gates, Jr.) の "The Black Letters on the Sign: W.E.B.Du Bois and the Canon." (*Darkwater: Voices from Within the Veil*) の中の "the origins of Du Bois's use of the concept of 'double consciousness'" に関する議論の中にも「二つの自己」の関係の複雑さが示唆されている (xiii-xiv).

19　この文脈では「認識」を促す動詞の一つである. デュボイスは他にも "Awake America" (1917) 等のエッセイでも "Awake" を「認識させる」ための動詞として使っていた. この中で "We cannot lynch 2,868 untried black men and women in thirty-one years and pose successfully as leaders of civilization." と述べている (379).

20　デュボイスはこのエッセイの中で "we raise our hands to Heaven and pledge our sacred honor to make our own America a real land of the free: To stop lynching and mob violence. To stop disfranchisement for race and sex . . ." 等とスローガンを唱えている(379).

参考文献

Aptheker, Herbert. Introduction. *Darkwater: Voices from Within the Veil.* Millwood: Kraus-Thomson Organization, 1975. 5-26.

Byerman, Keith E. *Seizing the Word: History, Art, and Self in the Work of W.E.B.Du Bois.* Athens: The U of Georgia P, 1994.

Du Bois, W.E.B. "Awake America." *The Oxford W.E.B.Du Bois Reader.* Ed. Eric J. Sundquist. New York: Oxford UP, 1996. 379.

—. "Criteria of Negro Art." *The Oxford W.E.B. Du Bois Reader.* Ed. Eric J. Sundquist. New York: Oxford UP, 1996. 324-328.

—. *Darkwater: Voices from Within the Veil.* 1920. New York: Dover Publications, Inc., 1999.

—. *The Souls of Black Folk.* 1903. New York: Penguin Books, 1996.

—. "Strivings of the Negro People." *Atlantic Monthly.* Aug. 1897: 197.

Feagin, Joe R. Introduction. *Darkwater: Voices from Within the Veil.* Amherst: Humanity Books, 2003. 9-24.

Franklin, John Hope, and Alfred A. Moss, Jr. *From Slavery to Freedom: A History of African Americans.* 8th ed. New York: Alfred A. Knopf, 2001.

Gates, Henry Louis, Jr. "The Black Letters on the Sign: W.E.B.Du Bois and the Canon." *Darkwater: Voices from Within the Veil.* New York: Oxford UP, 2007. xi-xxiv.

Marable, Manning. Introduction. *Darkwater: Voices from Within the Veil.* Mineola: Dover Publications, Inc., 1999. v-viii.

Moses, Wilson J. "The Poetics of Ethiopianism: W.E.B.Du Bois and Literary Black Nationalism." *American Literature* 47. 3 (1975): 411-26.

Rampersad, Arnold. *The Art and Imagination of W.E.B. Du Bois.* Cambridge: Harvard UP, 1976.

Zamir, Shamoon. *Dark Voices: W.E.B.Du Bois and American Thought, 1888-1903.* Chicago: The U of Chicago P, 1995.

Zuckerman, Phil, ed. *Du Bois on Religion.* Walnut Creek: Altamira, 2000.